

# 雨宿りの人妻は、 年下の前でだけ濡れていく―― 軒先の三十分――

夫に見てもらえない専業主婦が、雨に濡れた年下の配達員を介抱するうちに、その人の前でだけほどけていく背徳純愛

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

## プロローグ

この地区を回る配達員のあいだで、篠原美咲しのはらみさきは「感じのいい奥さん」で通っている。

呼び鈴を鳴らせば、いつもきちんと身支度を整えて出てくる。伝票を受け取る指は白く、礼を言う声はやわらかい。どんなに荷物が多い日でも、品のいい微笑みを崩さない、隙のない人妻。

——その人が今、雨に閉ざされたこの部屋で、俺の腕のなかで、まるで別人みたいに息を乱している。

午後だというのに、部屋はずいぶん薄暗かった。窓の外は、さっきから途切れない豪雨だ。灰色の雨が幾筋もガラスを伝い落ちて、世界の輪郭を、ぜんぶ滲ませてしまっている。雨音だけが、部屋の隅々まで満ちていた。その音に紛れて、二人のたてる音は、どこにも届かない。

玄関先での美咲を思い浮かべる。宅配の伝票を渡せば「いつもありがとうございます」と頭を下げ、印鑑を探すあいだも、こちらを待たせまいと気を遣う。近所の主婦に囲ま

れても、一步引いた品のよさを崩さない。誰もが「篠原さんの奥さんは、ほんとうにいい人ね」と口を揃える、あの穏やかな佇まい。たたず

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

「……湊くん」

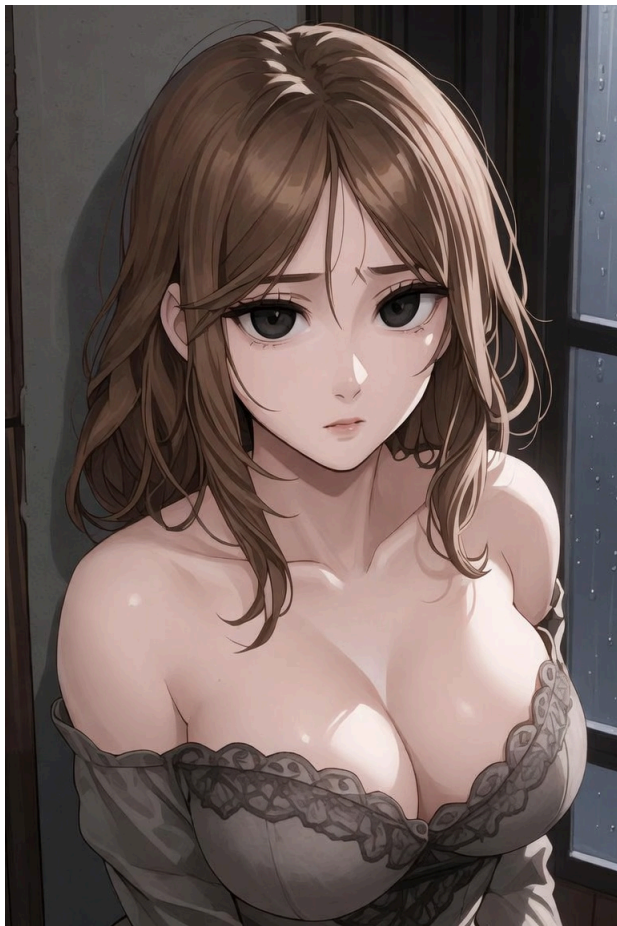
つやのある黒髪が、汗ばんだ白い首筋に幾筋も乱れて貼りついていて。いつもは穏やかに伏せられている大きな目もとが、今は潤んで、こちらを見上げてくる。左手の薬指で、細い指輪が、雨曇りの光をにぶく弾いた。その光だけが、俺たちのしていることの後ろめたさを、静かに思い出させた。

ほんの三十分前まで、俺はこの家の軒先で、ただずぶ濡れの配達員だった。雨をしがせてもらうために、申し訳なさそうに頭を下げていただけの。それが、どうして。乾いたタオルと、温かい珈琲と、彼女の手のひらの体温。そのひとつひとつが、雨音に閉ざされたこの部屋で、引き返せない熱に変わってしまった。

壁の向こうの世界では、雨が街を白く煙らせている。誰もが軒下で足を止め、空を見上げている。けれど今、この部屋に満ちている熱を、知る者は誰もいない。それでい

い、と湊は思った。この雨のあいだだけは、二人だけのものだ。

それでも――俺だけが知っている。この人の、表の顔と、誰にも見せない無防備な顔を。



——ここから先は製品版でお楽しみください——